

研究課題

情報通信メディア（テレビ会議、e-mail）の 効果的な活用法を考える

副題

～ハワイと日本の高校生による「音楽を核とした国際理解教育」
をデザインする～

学校名 **大阪府立夕陽丘高等学校**

所在地 〒543-0035
大阪府大阪市天王寺区北山町10-10

学級数 24

児童・生徒数 958名

職員数/会員数 69名

学校長 西出 博行

研究代表者 谷廣 進一

ホームページ
アドレス <http://www.osaka-c.ed.jp/yuhigaoka>



1. はじめに

本校では、「教育の三本柱」の一つとして、「国際交流体験を通して自己発見と他者理解を深めること」を目標に掲げており、国際交流が非常に盛んである。その方法は、次の3つのパターンに分類できる。

(1) 本校生徒が海外へ出て行う国際交流

- ・海外修学旅行(全員参加、これまでの渡航先は韓国・台湾・マレーシア)
- ・ニュージーランド語学研修(希望者参加、隔年実施)
- ・ウィーン音楽研修旅行(希望者参加、隔年実施)

(2) 海外の学校や団体が本校に来て行う国際交流

- ・フランス、中国からの留学生受け入れ
- ・韓国、中国、台湾の高等学校による訪問、交流
- ・韓国、中国、シンガポールの音楽団体による訪問、演奏交流
- ・日韓の若手演奏家による共演

(3) インターネットを通じた国際交流

- ・ハワイ・プナホウ高校とのテレビ会議

本研究は、これらのうち(3)に焦点を当てて実施する。

本校は創立105周年を迎えた伝統校で、多くの文化人を輩出している。卒業生には音楽界で活躍している方が多く、先輩諸氏が築いた伝統を受け継ぎ、「夕陽の楽の音、永遠たらん」と平成7年に大阪府立高等学校として唯一の音楽科が設置され、今年度で16年目を迎えている。

このような本校の特性を活かし、音楽科の学校設定科目である「和楽器演習」を「総合的な学習の時間」「情報」とタイアップさせ、情報通信ツールを用いた国際理解教育について研究しようとするものである。

2. 研究の目的

ハワイ・プナホウ高校との音楽を核としたインターネット国際交流を通して、自分たちの思いや情報をいかに適切な情報通信ツールで的確に伝えることができるかに焦点を当て、教員・生徒で「情報通信ツールの効果的な活用法」、「思いや情報の伝え方」の2点について理解を深め、情報通信ツールを有効に活用した国際理解教育の具体的実践方法について確立を図る。

3. 研究の方法

- (1) E-mail で自己紹介する。
- (2) ネット掲示板で歌詞作成について意見交換する。
- (3) テレビ会議で、文化紹介、楽曲創作を行う。
- (4) 情報通信ツールに関する調査を実施する。
- (5) テレビ会議で、「海を越えたコンサート」を実施する。

4. 研究の内容

ハワイ・プナホウ高校との音楽を核としたインターネット国際交流は、平成17年度より継続して実施しており、今年度で6年目を迎える。交流の概要は次の通りである。

- (1) お互いの文化紹介
- (2) 「祝福」「心のふるさと」「大切にしたいもの」等、卒業に関するテーマについてイメージの交流
- (3) 最後には両校で「卒業ソング」を共同創作（ハワイ・プナホウ高校「日本語」選択生が日本語で作詞、夕陽丘高校生が「和楽器（箏・三味線）」で作曲し、演奏する）

過去の5年間で実施の流れについては定着してきた感があるが、内容については課題も見えてきたところである。具体的には、①音質のいい環境設定に課題があり、ワイヤレスマイク設備を更新する必要があったこと、②自分の思いを伝えたり、相手の考えを尊重しながら交流する際に、各情報通信ツールの特性を踏まえたものになっていなかったこと、以上2点が課題として挙げられる。

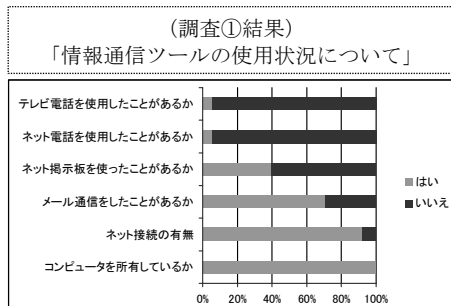
そこで、今回の研究においては、上記①②の課題を克服し、より有効な情報通信ツール活用法を探ることに重点を置いた。

5. 研究の経過

<4月～9月>テレビ会議に向けた事前学習

(1)教科「情報」：情報モラルを踏まえた理論的な学習、及び校内テレビ会議（プナホウ高校とのテレビ会議に向けた演習）、情報通信ツールの実践的な活用法を体験した。

(2)教科「情報」：情報通信ツールに関する調査①を実施。「情報通信ツールの使用状況について」



→コンピュータは100%の生徒が所有しており、そのうち9割以上の生徒がネットに接続している。メール通信の経験も7割あるが、ネット

掲示板の使用経験は4割程度、ネット電話やテレビ電話の使用は1割未満と少数である。

(3)学校設定科目「和楽器演習」：箏・三味線の特徴、歴史的背景を学ぶとともに演奏技能を身に付け、交流活動の際の作曲に生かす。（パワーポイント等の活用）

(4)環境設定における課題を改善するため、情報通信ツールの整備、更新を行った。

- ・Webカメラとして活用するためのDVビデオカメラを整備。
- ・音質のいい環境設定に課題があったワイヤレスマイク設備を更新。
- ・大阪府の学校情報ネットワークを活用したインターネット掲示板を整備。

<10月>第1回テレビ会議に向けて

(1)グループ分け、自己紹介ビデオ撮り、プナホウ高校の卒業式のビデオ鑑賞等を行った。

(2)プナホウ高校の生徒にテレビ会議で伝える必須内容を

吟味し、効果的かつ分かりやすく伝える方法を検討した。

(3)インターネット掲示板を活用し、自己紹介を行った。

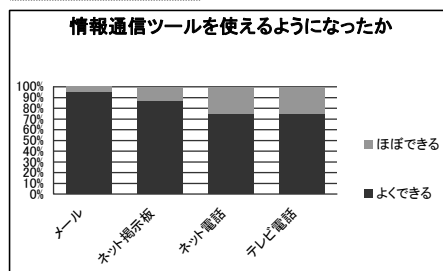
<10月19日>第1回テレビ会議実施（公開授業）

(1)お互いに自己紹介、文化や日常の高校生活、卒業式について交流を行ったあと、第2回のテレビ会議に向けて検討すべき必須事項を吟味し、効果的かつ分かりやすく伝えるよう努めた（5グループ同時に一斉会議）。



(2)情報通信ツールに関する調査②を実施

「情報通信ツールを使えるようになったか」→調査①結果と比較して、情報通信



通信ツールを取り扱うスキル（特にネット電話、テレビ電話）がアップしていることがわかる。

<11月>第2回テレビ会議に向けて

(1)メールやネット掲示板を活用し、プナホウ高校生徒との共同創作の計画を立てた（プナホウ高校生が作詞、夕陽丘高校生が作曲を担当）。

(2)具体的には、プナホウ高校生による歌詞の掲載、夕陽丘高校生による歌詞のアドバイスを、曲についての意見交換、曲のタイトルと内容の共通理解など。

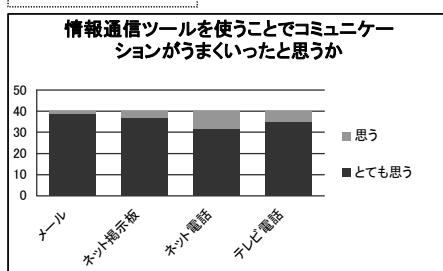
<12月2日>第2回テレビ会議実施（公開授業）

(1)オリジナル「卒業ソング」のイメージ、歌詞について交流（5グループ同時に一斉会議）。創作曲に関する質疑応答を行った。



(2)日常生活（音楽、ファッション等）についてフリートークを行った。

(3)情報通信ツールに関する調査③を実施「情報通信ツールを使うことでコミュニケーションがうまくいったと思うか」→情報通信ツールのスキルアップ（調査②結果）と比例して、活用能力も高まっていることがわかる。



のスキルアップ（調査②結果）と比例して、活用能力も高まっていることがわかる。

<12月～1月>第3回テレビ会議に向けて

- (1)両校の打ち合わせにより決定した歌詞に作曲した。
- (2)ハワイ・プナホウ高校の生徒用に歌の部分とカラオケ・ヴァージョンを録音し、インターネット上の共有フォルダにUPした。
- (3)プログラム原稿（歌詞・楽曲への思い）を作成した。
- (4)「海を越えたコンサート」に向けリハーサルを実施し、作品の最終打ち合わせを行った。

<2月10日>第3回テレビ会議実施（公開授業）

両校による演奏「海を越えたコンサート」

本校内「ヴィオーラホール」で、5グループが順次演奏する。夕陽丘高校生の歌と和楽器の演奏に合わせて、プナホウ高校生が歌う、両校によるコラボレーション。共演の後、お互いに感想を述べ合う。



プログラムの一部
(黒塗りは個人名)

Group 2 いつまでも友だち



なにか悩んでいるとき 助けてくれる
いつも支えてくれる 大事な友だち
もしも助けがあるなら みんなで助けあい
いついつまでも 友だちでいよう
いろいろな思い出を 心にもって
学校ですごした 楽しい時間を
いついつまでも 忘れない



★卒業式に歌うということで、皆が仲良く元気に
羽ばたいていける様に明るい曲調にしました。と
ても歌いやすく、いつでも口ずさみたくなるよう
な曲です。この曲を歌って、皆がもっともっと元
気に、そして友だちの大切さをより、感じてもら
えたら嬉しいです。

<今後の予定>

5つのグループの作品から1曲をハワイ・プナホウ高校側が選択し、演奏 DVD を作成する。平成 23 年5月下旬、プナホウ高校卒業式において、DVD をバックにプナホウ高校日本語選招生全員で演奏する予定。

6. 研究の成果と今後の課題

国際交流体験という各教科の学びが生きた活動を通じて、情報通信メディアをいつ、どこで、どのように使用するのが効果的であるかを学び、活動内容に応じた最善の情報メディア通信システムの確立ができた。これまで演奏発表を目的とした和楽器の実技習得に重点が置かれがちだった学校設定科目「和楽器演習」は、「総合」と「情報」との学習のつながりにより、それぞれの教科・科目での学びが国際交流で生きた活動とすることができた。

今後の課題としては、ハワイと日本との日程調整、ハワイ、日本における情報担当者の人的な継続配置、英語によるコミュニケーション能力の向上を踏まえた英語科との協力体制が挙げられる。今回の研究での成果を基に、さらに望ましい形で国際交流が実施できるよう、努力を継続したい。

7. おわりに

今回実践研究助成の指定を頂いたことにより、従来の取り組みにおける課題を克服し、実施環境を飛躍的に向上させることができた。また、研究の成果によって、情報通信ツールのより有効的な活用法を探ることができた。今後の取り組みに活かすとともに、広く成果の普及に努めたい。